

ロトルーの喜劇「忘却の指輪」

浅谷真弓

はじめに

プレイヤード版17世紀演劇の第1巻を編むにあたって、シェレールはロトルーの「忘却の指輪」を選んだ主な理由を、喜劇というジャンルの復興を記す作品であるから、と言っている。

もちろんそれまでに喜劇を名乗る作品がなかったわけではなく、あえてそう位置付けるだけの根拠はあった。観客にショックを与える事なく笑わせる作品の実現にむけて、ロトルーはファルスとは別の方法を模索した、と。もうひとつ、選者を引き付けた「おもしろさ」は喜劇の復興を目指しながら、むしろそのために、であろうか、ジャンルの枠組みを覆す、悲劇、悲喜劇、あるいはパストラル、ファルスの要素を備えた構成にあった。なるほど、これは多頭の怪物の様相を呈している。しかし大団円に至れば、観客は、劇的時空間の統一性、簡単に言えば作品としてのまとまりを十分に感じられるだろう。非常に巧妙なやり方で、個々の要素の持ち味を損なう事なく、全体は喜劇のありかた、なんであるか、を問い、答えるものとなっているように思うのだ。まずは喜劇とは本質的に対極をなすはずの悲劇の要素に注目し、再読を行いたい。

1 悲劇、狂えるアルフォンス

主要登場人物は国王、王妹、公爵、公爵令嬢、伯爵、王妹の恋人の六人。韻文五幕、場の連続は保たれないものの、物語の筋は一貫しており、時間は二十四時間以内、主な展開の場所は王宮内、牢獄など。死者は出ず、正気に戻った王の寛大な裁定が際立つ結末。1630年以前、ブルゴーニュ座で上演された。

王であることと、恋する男であることは両立するのか。シシリア王アルフォンスの悩みを要約すれば、こうなるであろう。だが生まれながらの国王であった男は、まよわず、王であることをもって、恋に利するよう、手段を選ぶ。恋する娘を他国の伯爵に嫁がせようと画策した父親の公爵を捕らえさせ、許婚の、その伯爵もまた牢獄に送り込む。娘は王の真意をはかりかねながら、ひたすらに王を信じようと、たとえ侍女になじられても、その時を待つ。

してこの偽りの恐れは屈辱のうちに、

公爵の旨を明かし、伯爵の意を挫こう 王、第1幕第3場 151行

閣下の徳にもまして我が君に忠し、

わりなき職務に服するは本意にあらねど、

お許しください、あなたさまを、陛下はわれをつかわされ、
捕らえよとのご命令

いかなる由がかような意を義としたか、

お怒りが罪の大いなるを証してあまりある、
陛下は伯爵もご加担とおぼしめし、
嘆かわしき由により、われらはここへ参りました 護衛隊長と公爵、第2幕第3場 307行

さらば、神なる、我がより甘き煩いの由よ 伯爵、姫に、同 337行

見えようか、いかなる心遣いにてわが君が我を扱い、
していかに、かの君のおのが法にて生きるはたやすきか、
このたくらみのよし誉れあると言えようなら、
私の承知したるはかく認めたものとしよう 姫、小声で侍女に、同 345行

されど、意を決し、歩まれなされ、しかるべきよう、
玉座に昇られるごとく、絞首台ではあらで、
たえてなし、かく美しき、良き牢獄は、
冠へ至る道のほかには 侍女、同 349行

父親と許婚を捕らえるのは、いつわりの、戯れの陰謀のはずであった。ふたりが翻意すれば、拘束は簡単に解かれるだろう。だが、事態は一転、申し開きの場で再会した王は、姫を恋した記憶を失っている。

おお、何を我は聞きしか、
捕らわれ人と、なにゆえに、そのものたちが無実であれば、
アレクサンドルらはともどもに我に従うておる 王、第2幕第7場 464行

おお、なんと、野心の強きこと、その悪徳は、
妙なる力もて魂までも滑り込む、
高慢の、この甘き毒薬、人心に居を定め、
他のすべての罪によりて征服者となれり、
わが身の何たるかを見誤り、なんと我らは取り違えよう、
王たらん、人々の主たらんとなす美德を、

これらの名はただその慈愛にのみかかる、
王は何事もなしえず、おのが情念のうえには 王、同 471 行

実のない、くりごとは控えよ、傷つきし心に、
そなたらは我を狂人のごと扱いたきや、
そは我を見誤れり、して我はかくすこやかなる魂をもち、
かような話に耳を貸すも苦しからずや、
いかなる理由で、姫よ、ここへ参った、
何人が我の知らぬこれら狂人どもを中へ入れた 王、第 3 幕第 2 場 599 行

恋に自分を失い、王であることを忘れていたアルフォンスは、皮肉にも、狂乱して初めて正論を語り、理に適ったふるまいをする。よこしまな思いを寄せる恋人ではない、忠臣の姫に、望むことはないか、とたずねて、父と伯爵の解放を乞われると、

我は信ず、科もなくかものらは捕らえられしと、
して我は彼らの自由に同意しよう 王、同 647 行

そして第一の発作は收拾し、「正気」に戻った王は再び公爵と伯爵の拘束を命じ、即座に第二の発作に突入する。

我は我を見分けられぬ、ただひとつ、
我は見、我は聞き、我は話せど、そなたらを知らぬは確か 王、第 3 幕第 7 場 827 行

当初より、「忘却の指輪」によってこの王の狂乱を仕組んだ王妹とその恋人は、第二の発作に乗り、第 4 幕において、王権奪取の障害となるであろう公爵を亡きものにしようと、

かの者の死は陛下のご安泰に必要なこと 王妹、第 4 幕第 2 場 928 行

と進言し、国王代理の地位を約束させ、退場する。運命はまだアルフォンスを見捨てていない。道化の架空の手柄話に感動し、乞われて、指輪と金の鎖を投げ与えるのだ。

我は知る、金は我らの今の世にすべてをなしうる、
それこそが人の諸悪の根源と 王、同、第 4 場 1005 行

投げ捨てよ海へ、かく忌まわしき鉞物は、

見いだすがよい、なんぞ別のさだめを 王、同、1019行

野心を嫌い、高慢を戒め、金品に執着しない、理想的な王は指輪を捨てると同時に豹変し、狂乱中に発した命令に忠実な者らを剣をもって威嚇した。指輪をもらった道化は主の異変に気づき、王自らが公爵の死刑と姫の伯爵との婚姻を命じた、と明かす。一人きりになったアルフォンスは心底絶望する。その後続く、死刑執行を前にした父と娘の別れの場面は秀逸である。

とどめよ、そなたの涙の、さだめなき流れを、
そはなにもものもなしえぬ、我をこの世にとどめようとて、
してむしろ幸いと思おう、我らの神々の御加護を、
我をこの地より奪い、天上へ召されるがゆえに 公爵、第5幕第1場 1109行

もし父の死なば、我は人の世に残るべきや、
いな、いな、わが首をこそ惨き手に差し出そう 姫、同 1143行

少なくとも、わが意を揺るがそうなどと努めるな、
かような思い込みはわが苦しみを増すほか、何事もなさず 侯爵、同 1146行

備えはついた、止めを、わが命とふたりの涙に、
我より目隠しを外し、ふたりの目に、
あるいは、後生に、ふたりをこの場より去らせたまえ、
惨き者よ、逃れさせよ、わが不幸を見ぬよう、
三たりを殺すなかれ、ただ一人のため 侯爵、同 1162行

危機一髪、王が駆けつけて、

そなたの、我に忠するを恐れしか、
時を延べたが無実を救うぞ 王、第5幕第2場 1175行

この不正を許されよ、さもなくばこの罪を裁かれよ 王、同 1192行

父を解放し、娘に正式な婚姻を申し込む。道化の機転に助けられ、我が身を顧みて、真の統治者であろうと決意したアルフォンスは、一計を案じ、再び狂乱したふりをして、妹らの陰謀を暴く。最終場、彼らのために命を危険にさらした侯爵がすべての裁定を委ねられる。

お望みとあらば、宮廷より遠ざけなさいませ、
ふたりをおつかわしに、どこかへ、いつかお戻りになるまで 侯爵、第5幕最終場 1504行

王は、すぐに立ち退くことを条件に、妹と恋人の結婚を認め、命じるまで帰るな、と付け加えて、サラゴサへ「追放」する。

ただ愛の最も甘き法のみにてこの地を統べたまえ、
シシリアにさかえあるよう、我と愛とふたりながら王として 王、同 1524行

アルフォンスを変えたのは、第1幕で自らそう称していた「偽りの恐れ」であった。迷妄を打ち砕き、罪を認め、人を許したとき、彼は狂乱のさなかに語った、理想の君主に近づいた。この王はやがて、より困難な状況を経て、17世紀全体を統べる、あの名君たちへと成長していくだろう。その前にまだ、波乱の生涯を送る女主人公の物語を見なければならない。彼女の名はレオノール、悲喜劇に現れた最も美しい女性のひとりである。

2 悲喜劇、幸いな忘却

主要登場人物は王妹、その恋人、兄王、兄の恋人、恋人の父親、父が決めた許婚、魔術師、ほか。ジャンルの典型に従い、場の連続は保たれず、筋は二組の恋愛が絡んだ複雑なもので、時間は特定しがたいが、だいたい1日以内、場所は王宮、魔術師のへや、牢獄など。魔術、尊属殺人を匂わせる陰謀や狂乱、殺人未遂、死刑執行といった見せ場に富み、急転につぐ急転は切迫した状況を演出し、見る者を飽きさせない工夫が随所にこらされている。1630年代を賑わす、後の悲喜劇ブームに先立った、火付け役のような作品。

王の妹レオノールは、身分違いの恋に悩んでいた。兄が反対することくらい、わかっていた。だから最初は、ただ自分たちのことを認めてもらいたかっただけだ。恋人に、なにか兄の意志を曲げさせる妙案はないか、とたずねたとき、彼女は、シシリアの王権など、欲しくはなかつただろう。

王筋は兄様の手にあってこそ貴いもの、
兄様のおぼしめしでシシリアが栄えるのを見るのはうれしい、
でもきっと、もっと甘い力をもつでしょうに、
夫の手にそれを渡すことができたならば レオノール、第1幕第1場 55行

兄様の命が助かるなら、あなたの望みを認めましょう、
でも命はとらずに筋だけをとることなんてできるの 同 63行

この難問に答えるべく、恋人のレアンドルは魔術師の元へ急ぎ、つけた者の判断力を奪うという魔

法の指輪を手に入れる。魔術師は報酬を受け取らず、

骨折りの代償は、ただわたしを愛してくださいまし 魔術師、第1幕第5場 217行

と謎めいた言葉を残す。やがてこの言葉はふたりの運命を荒海へと投げ込み、最大の危機を迎えるにあたって、予想外に重要な意味をもつことになる。レアンドルは魔術師に会う前に、自分でこう言っていたのを、覚えていないようだ。

ご安心ください、姫よ、恋人を信じて、

すべてがうまくいくのをご覧に、ただぼくを愛してください 第1幕第2場 70行

恋人は魔術師に答えず、王の着替えの場へ、顔を洗うときを狙って、指輪をすり替えようと馳せ参じる。一方王は、自分では軽薄な恋愛にうつつを抜かしながら、妹にはまっとうな結婚をして欲しいと望んでいた。女の気持ちはわからない、とか、ひとりごちに、道化の噂話に耳を傾け、油断しているすきに、まんまとレアンドルに指輪を取り替えられてしまう。

そら、恋の神様が報いを、眠りまでもが手を組んで、

目の下へと滑り込んでいくわい 王、第2幕第6場 447行

もはや部下の顔さえ見分けられない。

薄もやの中では唇は動かぬ、

もっと明らかに、いや、あなたはどなたかおっしゃい 王、第2幕第7場 455行

指輪の効力は決定的だった。報告に駆けつけたレアンドルに、レオノールは、

でもこの策略は少し悲しい、

願いはひとつと思っても、ゆっくりにはか効かないの、

あの指輪ならもっと素早く、

わたしたちの運を確かに、冠をくれてよさそうなもの レオノール、第3幕第3場 697行

それもそのはず、指輪は知らぬ間に兄の恋人、リアヌの手に移っていた。前後不覚に、恋する王の顔が見分けられない、哀れなリアヌを、ふたりは目の当たりにする。抱き締めようとする王の腕を振り払い、無礼を詫びて、

なんと、おお、わたしはこのようにひどく辱めを受けるのです、
閣下、もしわたしの無知が過ちに加担したなら、
けれど、自分の罪を言い逃れようというわけではありません、
どうか命だけはお助けを、お怒りでありましたら リリアヌ、第3幕第5場 733行

王は、頑固な父親と恋敵を釈放したとの知らせに激怒し、より暗い牢獄へ閉じ込めるよう命じ、様子のおかしい恋人から指輪を取り返すと、再び判断力を失って眠りにつく。運命が気まぐれに指輪の持ち主を変えるのを見たレアンドルは、兄を首尾よく操るためには侯爵が邪魔だと知る。確かに兄は殺さないが、

だが侯爵の破滅はぼくには必要なことと、
この幸いな事態の完璧を期するなら、
あのひとの努力はぼくらの願いに反するだろう、
そしてあの人の死がぼくらを安心させてくれるのだ レアンドル、第4幕第1場 869行

と決意を固めた。一度の失敗で追い詰められたふたりは真の策謀へと急速に傾斜していく。王自らの判断力だけではなく、国政にとって判断力、良識として機能していた侯爵の命を断とうと言うまでに。レオノールの言葉に恐れをなしていたレアンドルはもういない。

そんな幸せがぼくたちの年の甘さに加えられるかな、
もしあなたの愛情がぼくの勇気を助けてくれるなら 第1幕第1場 59行

第5幕、道化から王の状態を聞かされ、ふたたびレアンドルを絶望が襲う。

どんな男が今日、ぼくより不幸だろう、
不当にもぼくの願いに耳をかさない運命よ、
ぼくから永遠に光の恩恵を奪ってしまっておくれ、
王の様子を見て、意をくんであげなさい、
ぼくを墓場につれていけばいい、あの人が元気なら、

ファブリスに、

王はまだ夢を見ているの

神様は一時前に魂を治してくださいました、
多くの人々がこの豹変に苦しんでおります 第5幕第4場 1228行

残された方策はただひとつ、

ぼくは何をできよう、ああ、たとえ幸せな結婚が、
そのなりゆきとぼくのさだめを結び付けようと、
ぼくが望める最も甘い果実が、
ぼくの死だとするなら、この腕は何を引き延ばせよう 同 1245 行

姫をおいて死ぬよりない。最終場、ふたりは王のもとへ呼ばれた。またも狂乱した王は立ち上がってレアンドルに王位を譲ると言い出す。だがレアンドルは運命のあてどなさをいやというほど味わった後で、これを辞退する。

ぼくには、まっとうな言い訳はひとつもみつからない、
たとえこの罪の作者が愛だけだったとしても、
普通に判断すれば、目を閉ざした愛のゆきすぎが、
最初の、第二の事態を引き起こしたんだ 第 5 幕最終場 1453 行

膝をついて、続けて、
陛下、神々の前にこの罪人はお誓い申し上げます、
あなたの足元にこの罪のお許しを乞いながら 同 1465 行

怒って、
裏切り者ども、まさしくおまえらがわたしを脅かしたのだ、
辱めを受けて死ぬのが当然の報いだ 王、同 1467 行

王はレアンドルを試したのであろう、

アレクサンドルよ、実に、この稀な奇跡は、
ならびない効果をもたらした、この奇跡自体がならびないように 同 1469 行

と前もって言いながら、裁定を彼らの陰謀で最も深刻な被害を受けた侯爵に任せる。

つける薬のない、この病いを許してあげてください 侯爵、同 1502 行

妹は、兄の寛容に感謝して、

なんとすぎたお言葉でしょう、わたしたちの罪深い魂には、
わたしたちは陛下に、陛下、永遠の御恩を負うものです 同 1513 行

王も侯爵も、愛のためになした暴挙をみな忘れてくれた。「ただわたしを愛してください」と言ったレアンドルの言葉と、魔術師の呪文はこうして、幸いな忘却へとみなを導き、指輪の奪った判断力とは、結局、愛以外のよこしまな何かを指したのだ、と教える。王もまたこの奇跡に十分な感化を受け、愛のみが自らを支配する、と宣言して、幕を閉じる。彼らをここまで変えることに成功した愛とはなにか。見つめあう眼差しだけが互いを生かし、支える、無垢な感情の、その正体は。ふたたび出会うために別れ、会うたびに恋する、幼い恋人たちはパストラルの登場人物に似る。

3 パストラル、レオノールとレアンドル

レオノール、レオノールの恋人のレアンドル、レオノールの兄、兄の恋人、その父親、許婚、魔法使いが主な登場人物。田園生活を背景に、羊飼いの恋愛を典型的に描くパストラル風の設定で、魔法使いの登場や記憶喪失などが効果的に使われている。書割の花園は幸福な恋人たちの眼差しを通して命を与えられ、世界は新しく生まれ変わる。見つめあうだけで互いの存在を証すような関係こそが彼らの恋愛である。そして、多少なりとこの原理から逸脱すれば、登場人物は彼らの神から罰を受ける。恋する人を見分けられなくなったり、自殺の危機に見舞われたり、と。だが、こうした障害は次に訪れる幸福な再会のための口実にすぎない。冬の後に必ず春がめぐってくるように、約束は果たされる。そのとき、命は豊饒な未来をうたい、永遠に年をとらない愛の神を称える。過去のゆえに火に焼かれる最後の審判など、やってこないのだ。物語のはじめに、レオノールはレアンドルの声を聞いて、無言の自然を発見するが、この無言はどんな論説より饒舌で説得力に富む。

ああ、いったいだれがこんな美しいお話にあらがうことができるでしょう、
この木とこの岩は恋をしているかそれとも口がきけないの、
だからあなたの言うことを聞いて、これらの花々と泉は、
なにか、はじめての苦しみの、思い出をもつのだと思う 第1幕第1場1行

目を奪う自然の美しさが、恋人の声の前では表現力を失い、苦痛を覚えると言う。その対照が自然を逆照射し、注目を集め、対象の美を生き生きと描き出すのに成功している。風景は心情を描写し、心情は風景と一体化して、観客の感情に浸透する。レアンドルではなく、レオノールの声がレアンドルと新しい世界とを我々の前に現出させた。

むしろ、あなたの聖なる魅力を見て、とってください、
花々と泉は、愛の神はさらにまた弓矢をもっている、と感じている、
このナデシコは、身を屈め、あなたを褒めたたえ、

もはや自分の顔に魅せられることはないように見える、
エコーはもうそれを愛さない、静かにしておいてやる、
姫よ、あなたの魅力的な言葉に答えるため、
ぼくが言い過ぎたか、黙るべきか、ご判断を、
岩でさえもそんなことはできないと思いますが 同、5行

ナデシコと訳したのは、<oeillet>で、<oeil>に語源をもち、特にカーネーションを指すらしい。エコーは数多い森、林、沢地などのニンフのひとり、容姿のよい歌上手として知られる。父親は人間だったが、ニンフたちに育てられ、笛や琴や歌を習い覚えた。牧神パーンに言い寄られながら、極度の恥ずかしがりやで、これを拒んだため、牧神は腹を立てて、羊飼いたちを狂乱させ、エコーを引き裂かせた。それからニンフの味方の大地はエコーのバラバラになった四肢を隠して、娘が昔したように、人の声や歌を真似て繰り返すようになったという。いかに美しいナデシコも、レオノールの美貌にはかなわず、エコーの歌の主題にはならない。二度繰り返して言うに及ばぬというわけだ。レオノールは返して、

天がわたしに与えた魅力がいかに弱いものでも、
レアンドル、わたしは娘、そして称えて欲しい、
わたしがすきなのは好ましい、魅力、美という言葉、
きずな、ためいき、恋の炎、つれなさという、
わたしが見たいのはあなたの気分がどこでもわたしの気に入るところ、
聞きたいのは、あなたが口ごもり、わたしに嫌われるのではないかと恐れるところ、
わたしは、あなたが心配を口にするのを見ると、悲しくなる、
空に目をやって、(眼差しで)空を凍らせるのを見ると、
花々は決してこれほどに甘い、強い香りは発しない、
あなたのきれいな手がわたしの胸にそれをくれるときほどには 同 19行

わたしは憎むのです、こんなに長く話す自分自身を、
なぜならあなたの声だけがわたしの望みをかなえてくれるのだから 同 33行

優しいレアンドルは、恋人の言うとおりに、恋する幸福の次には悲しみを語って、

そしてレアンドルは憎むのです、レアンドルの生まれが、
こんなに多くの逸脱をもって愛してはならないと責める、
高望みをしてはならぬ、というのを、王たちだけが、
その願いを遂げる権利があるのに 同 35行

いっそう甘く、感傷的な状況を作り出す。「現実」の惨い手は見せかけにすぎないとしても、ふたりの幼い恋心は、それを乗り越えようと、逸脱を犯してしまう。レアンドルの思い上がりを止める者はこの地上にはいない。

すべてがうまくいくのを見るために、ただぼくを愛してください 同 70行

魔法使いの言葉は、だから彼らを罰する神から遣わされた、呪文なのだ。

すべての骨折りの報酬として、ただわたしを愛してください 第1幕第5場 217行

愛の神は牧神と手を携えて、ふたりを未知の経験へ連れ出す。以下に展開される物語は、真実らしさ、現実味とは相容れない、いわば試験官の中の恋愛実験である。すべてはうまくいくだろうが、すべては骨折りだ。ただ愛することの困難さ。愛は現実には殆どありえない大きな負荷をかけられ、試されて、存在を主張する。恋のパニックに巻き込まれているレオノールの兄もこの実験の被験者である。

あの人の美しい目がわたしの心が嘆くのを治してくれる 第1幕第2場 85行

わたしの甘い狂乱の、あの美しい煩いの種に会おう 同 107行

当然、相愛のリリアヌも、また。

わたしは今日、よくわかったのです、恋の神には目がないことを、
神はあなたをもっと高貴な場所に導こうとしたのに、
わたしの短所を知っていて、あなたの長所を測ったら、
別の女性があなたの訪問の荣誉を受けるはずなのに 第1幕第3場 109行

兄はリリアヌに現実的な証拠を求めて、

そんな尊敬はわたしたちの願いには反するもの、
本当の恋人たちの間を引き裂いてしまう、
どうかただ一度、キスを 同 125行

と言うが、さらに現実的な反撃にあう。

そのようなご好意は罪というもの、
あなたの愛情が正当としてはくれませんが、
たくさん誓いをしたあとで、しあわせな結婚が、
どうしてわたしたちの恋する気持ちを結び付けないでしょう 同 127 行

この小さな拒絶が兄に一線を越えさせるのだ。

だが思いの外にわたしは不意を打たれている、
どんな恐れが、わたしの心よ、おまえの気質をこうも変えるか 同 154 行

不在から戻ったリアヌの父には、彼の盲目は既に知れて、批判を受け、

あなたはたくさん判断をすればいい、だがわたしたちは少なくとも知っている、
わたしたちの愛は判事も証言者も恐れぬ、と、
ただ美德だけがわたしたちの魂を傷つけたのだから、
美德だけがわたしたちの考えを統べる 第 1 幕第 4 場 161 行

などと反論し、逃げ去る。送り出す父親の独り言はふるっている。

まさしく、息が切れるほどにわたしは走った、
そして二頭の鹿がわたしの骨折りの成果となった、
王は出て行く、
だがいかにわたしが森の中で目的を達し、狩りをしたとて、
ここではそれ以上のことをしおせたのだ、王を狩り出したのだからな 同 171 行

そして浮かれ娘には、

おまえの目には、おまえの知恵の光を呼び戻さなければならない、
それがおまえに腕を広げさせたら、光に目を開かせるのだ 同 180 行

と忠告するも、取り逃がしてしまう。父の結論は、貞潔は美と一致すること稀なり、だ。この一点においては浮かれ男も同感のようである。

女性の行動を判断できるといったって、

見かけはしばしば魂とは別物だ 王、第2幕第5場371行

しかしそこは浮かれ男の浮かれ男たるゆえんだ、まったく反省がない。

もはや、愛の神よ、おまえの目隠しは恥のほかはないぞ、
おまえの家来の一人が、今日、おまえに打ち勝ったのだからな 第2幕第6場395行

あげくの果てに、顔を洗いながら歌う歌は、

恋人たちよ、もう涙は流さぬように、
嘆きも、ためいきもせぬように、
こんなにきれいな目に捕らわれたとて、
愛の神は自分の国をなくした 同429行

貴いものを手に入れて、
わたしはもう泣きはしない、
どんなに不安に思っても、
わたしはその魅力のあるじ 同437行

この自惚れはたちまち罰せられ、恋した相手を見失う。妹たちがすり替えた魔法の指輪で記憶をなくして、

あなたはこの美しいお方をご存じか、
この人にキスしたいと、強い欲望があなたをせかしている 第3幕第2場585行

まるで初対面の人を見るように言う。しかし、これはまた新たな恋の始まりに似ている。もう一度出会うために忘れ、会うたびに恋する、浮かれ男と浮かれ女は同じ状況を繰り返して、周囲を巻き込んでいく。

どんな魔法、どんなダイモーンがわたしの目をくらませるのでしょうか、
どうすればわたしは陛下に忠実になれましょう リリアヌ、第3幕第6場744行

魔法は浮かれ男を再度捕らえて、実験を続ける。

どんな運命がわたしを生まれた場所から引き出したのか、

力も支えも財産も記憶もなしに、
いまの自分を見てみれば、昔はこんなふうにしたか、
人間たちの最初の者は、世界が生まれたその時には 第4幕第2場 877行

こちらの魔法が解けると、今度はもう一人の浮かれ男が、策略が露見して、危機に瀕する。浮かれ男が救われるのは、同病相い哀れむ兄の寛大さと、当然ながら、愛の神の許しによる。

摘みましょう、陛下、摘みましょうバラを、刺のない 侯爵、第5幕最終場 1498行

愛しきよろこびのダイモンよ、母のみ胸より出でて、
愛の神よ、もはやパフェにシテールに止まらず、
すべての人の手のあいだに、我らの心に幸いをもたらせ 王、同 1517行

こうして八方がまるくおさまり、骨折りの教訓は、「ただ愛しなさい」と告げられた。解決すべき問題はひとつもない、ただ一人の約束がまだ果たされていないことを除けば。賢い道化、忠実な裏切り者、ファブリスの悪巧み、いや災難は。

4 ファルス、ファブリスの悪巧み

ファブリス、王様、恋人たちが主な登場人物。浮かれた王様が、恋人たちの策略で魔法をかけられ、ファブリスに大金を与えるという約束をしては忘れる、というのが筋の中心。王様の豹変とそれに付け込んだり、叱られたり二人のやりとり、切り替えの妙が笑いを生むが、ほかに恋歌のパロディーあり、ほらふき話あり、大袈裟な立ち回りあり、とバラエティーに富んだ内容である。深刻に傾きそうな話が、ファブリスの手にかかると、笑い飛ばしてしまえるから不思議だ。要所毎に挟まれるファブリスの、文字どおり独り舞台は、その後の喜劇の道化たちの先導役の一人を任じてよい、毒とくすぐりを備えた場となっている。事件はファブリスの機転で一挙に解決、満場の拍手は彼に十分な報酬をもたらしただろう。

どこへ走っていく、ファブリス、おい

お許しください 王様とファブリス、第1幕第6場 381行

登場の場面から走っているこの男は、王様に重要な情報をもたらす代償に、二千デュカを受ける約束を取り付け、紙とペンを探しに行く。口約束は当てにならない。そのすきに、妹の恋人が魔法の指輪を王様にはめさせようと、王様の顔を洗うのをうかがって、恋歌のパロディーを歌う。

レアンドルはもう泣かない、
恐れることも、ためいきも、もう、
この指輪をかえることができれば、
王様は自分の国を失うのだから 第2幕第7場 433行

王様がこの貴重な指輪をすれば、
ぼくはもう泣かないですむ、
ぼくの不安がどんなでも、
ぼくはその魔法で、主人になる 同 441行

こうして王様は、ファブリスのことを、まして報酬のことは、忘れてしまう。

どんな褒美だ、なんでそんな褒美を

よいお知らせの、
侯爵様と美女を捕らえまして 第2幕第8場 511行

書き付けを破って、退場しつつ、
おまえのたわけの相手はよそで探せ、
寒いバカ話を聞かせおってからに 同 519行

見送るファブリスのぼやき、

おお神様、いままでこれほどがっかりした男がいたでしょうか、
いまこのわたしの恥の半分を請け負ってくれる奴がいれば、
受けた物の大半をやってもいいのだからなあ 同 524行

勿論、受けた物は皆無だから、ファブリス以上の恥かき損は覚悟となる。次の場面で、王様は指輪を外し、先程の約束を思い出す。

おまえはむしろわたしの与えた物がうれしくないんだ、
そう望めば、サインしてやったものをなあ 第3幕第3場 679行

しばしお待ちを、
すぐさま筆と書き付けとご持参いたします 同 683行

そうやって戻ると、またまた王様は指輪をして、書き付けを破り、

おまえの病気は重篤とみえる、この病が治らぬなら、
狂気は大金をもって何を語るか 第3幕第7場 839行

激怒して、皆を引き連れ、退場する。残されたファブリスは呆然と、

またもういっかい、ああ、不幸なファブリスよ 同 841行

自分を「おまえ」と呼びかけ、さんざんぼやいて、結論は、

だけど運命の神様は女だぜ、そうしておれには金がないとくる 同 853行

と、わかったような、わからないような。しかし、悪巧みはここからだ。またもや様子のおかしい王様を手玉にするのは簡単と見て、架空の英雄をしたてあげ、狂気の語る物語に報酬を与えさせる。

勇敢な騎士よ、あなたには栄光がふさわしい 第4幕第4場 989行

こんなダイヤモンド、こんな鎖は投げ捨てよう 同 1014行

ファブリスは指輪と金の鎖を拾い集め、逃げ去って行く。

運命の神様がくれた大チャンスだぞ 同 1021行

なに食わぬ顔で再び戻るファブリスを、「正気の」王様が待ち受けている。もはやどちらが狂気なのか、判然としない。勝手に命令を変えた臣下に、抜き身の剣をかざして追いかけたら、とぼっちりのように、

おのれたわけたことを抜かしおって、
おまえだけは許さんぞ、目にも物を見せてくれよう 同 1097行

ファブリスにむかう。命からがらにかわして、男は考える。

さようでございますともさ、どんなわがままな運命が、

こんな甘いの中からこんな恐ろしいのを作り出したやら 同 1099 行

最終幕、顔色を変えたレアンドルを見てひらめいたのは、今度こそ運命の女神の気まぐれなのだろうか。

あの指輪があいつにどんな苦痛をもたらすんだ、
なにか新しい秘密があると見たぞ 第 5 幕第 4 場 1251 行

さっそく王様にご注進だ。

だからわたしはこの魔法は、
このダイヤモンドに隠されていると見ましたな 第 5 幕第 5 場 1279 行

自ら実験台を申し出て、指輪をはめて前後不覚に、

おれはだれだか自分でわからん、
ここはどこだい 同 1294 行

と、事実の証明に及び、王様が恋人たちを試す狂気の演技に加担する。最後の台詞は、

目を凝らし、耳を傾け、
沈黙をまもって、奇跡をご覧なさい 第 5 幕最終場 1353 行

と、もはや、走り回ってへとへとになった、道化の姿はない。主人に忠実に役割を果たす下僕然とした言い草だ。そんなファブリスの忠心ぶりに王様は、

そしておまえ、おまえは自分で思うよりずっとわたしには得難い奴だ、
きっと報いてやるほどに、おまえを愛していると思うがいい 同 1515 行

と言って、幕を閉じるのだが、その愛の具体的な内容が金品、地位のいずれであるかは知れずじまいである。「骨折りの代償はただわたしを愛してください」では、意味がない。なにしろファブリスは知ってしまったのだ、

運命の神様は女ですぜ、そうしておれには金がない

作者がもう一度繰り返さないでも、我々はファブリスとともに、内心でそうつぶやくだろう。第4幕、王様に指輪と金の鎖のありかを問い詰められ、ファブリスはかつらの中に隠したと白状して、それは王様を楽しませるためだ、とごまかした。

楽しませるだって、恥知らずめ、ああ、うつけた魂ども、
地獄へ行って自分の芝居を演じるがいい 第4幕第6場 1081行

地獄で芝居を演じるのはダンテの亡者たちだけではない。ファブリスも観客もこの世のあてどなさ、運命の気まぐれを前にして、離れて見れば滑稽な喜劇を演じ、人を笑わせているのにちがいない。独り舞台の嘆きはファルスの毒を皮肉な笑いに、我が身を顧みて笑えと肩にかかった無用な力を抜く。立派な悲劇も波乱の悲喜劇も甘美なパストラルも、ファブリスの脱力によって、新しい喜劇の流れに飲み込まれてしまう。描くテーマは同じでも、対象に注ぐ眼差しの距離感こそが、ジャンルを決定する。作者はこの当たり前のことを「忘却の指輪」で実証して見せたのだった。

おわりに

モリエールの喜劇は笑えない、と言われる。古いからではない。現代の読み手にとって切実な何かが、対象に距離をとることを拒むのだ。そういう意味では、続く世紀、<drame sérieux>などと称して、舞台から笑いを追放してしまった生真面目な唯物論者より、巧みな恋愛実験で観客をうならせた浮かれ男の方が、よほど大人だった。観客にショックを与えずに笑わせる、というのが、笑いとは本来、返す刀で自分を切ることでできるような精神にこそ許された快樂なのではないだろうか。ロトルーの喜劇「忘却の指輪」をもってその答えとしたい。

テキスト : *THÉÂTRE DU XVIIIÈME SIÈCLE* <I> .1992. NRF. GALLIMARD. choisis, établis présentés et annotés
par Jacques Scherer. Introduction et Notice pour *LA BAGUE DE L'OUBRI* de Jean Rotrou.

梗概 : 鈴木美穂、1987年、エイコス第III号、83頁から85頁まで